

戦後80年、教訓は何か

～先の戦争の教訓を私たちは胸に刻んでいるのか？～

2025年8月23日 ながつま昭 時局講演会資料

戦前との5つの共通点

- ① 国の借金が国内総生産の2倍超え
- ② 政治腐敗で政治の信頼が大きく低下
- ③ 格差（当初所得ジニ係数）がほぼ同じ
- ④ 外国人排斥の動きが加速
- ⑤ 米国が高関税を導入、ブロック経済が加速

昭和天皇拝謁記

戦後の初代宮内庁長官を務めた田島道治が昭和天皇との対話を克明に記録した「昭和天皇拝謁記」（岩波書店）。太平洋戦争が惨憺（さんたん）たる敗戦に至った要因は何か。歴史学では様々な解釈がなされているが、天皇は最大の原因は軍人の「下克上」だと考えていた。

「どうも段々考へれば下剋（克）上を早く根絶しなかつたからだ。田中内閣の時に張作霖爆死を厳罰にすればよかったのだ」（1952〔昭和27〕年5月30日）

「張作霖事件の処罰を曖昧にした事が後年陸軍の紀綱のゆるむ始めになつた」（51〔同26〕年6月8日）として、政府が軍をコントロールできない「実績、を作ったことが、のちの満州事変、2・26事件、日中・太平洋戦争につながったと天皇は見ていた。

天皇は開戦に対する責任論に悩んでいたらしく、「私が若（も）し戦争を止めたら内乱になつていたかも知れないネー。何といつても下剋上の勢がいつの間にか出来たから」（53〔同28〕年5月18日）と、自分が戦争を防ぐことは無理だったと言いつづけた。

（2023/03/21日経新聞「昭和天皇拝謁記」を読む－編集委員 井上亮より）

戦争のことば

- 先の戦争では、主観的願望を客観的事実にすりかえた（保阪正康）
- 戦争しなければならない状況を作らない。それが政治家の役割（福田康夫）
- 戦争は、その姿を現す随分前から始まっているものです。おそらくは人々が口をつぐみ、物申すことをやめたときから（「暮らしの手帖」編集部）
- 間違った戦争を始めないためには、間違った戦争を生み出さない国や社会の仕組み、指導者の適切な歴史認識が前提となる。

■ なぜ、勝てない米国との戦争に慎重だった海軍が開戦に踏み切ったのか？

「私が申し上げておきたいのはねえ、私は軍令部におる間はね、感じておったことはですな、海軍が“アメリカと戦えない”というようなことを言ったことがですね、陸軍の耳に入ると、それを利用してしまおうと。

どうということかという、海軍は今まで、その、軍備拡張のためにずいぶん予算を使ったじゃないかと、それでありながら戦えないと言うならば、予算を削っちまえ”と。そしてその分を、『陸軍によこせ』ということにでもなればですね、陸軍が今度はもっとその軍備を拡張し、それから言うことを、強く言い出すと。

（略）そういうふうになっちゃ困るからと言うんですね、一切言わないと。負けるとか何とか、戦えないというようなことは一切言わないと。こういうことなんですか」（海軍軍令部 作戦課 三代一就元大佐 戦後の海軍反省会にて）

■ 柳条湖事件は中国軍の仕業でなく日本軍の自作自演だった当時メディアも知っていた？

「のちに報道部長になる谷萩那華雄大尉というのがおりまして、記者クラブでわれわれに話してくれたんです。

『実は、あれ（柳条湖事件）は関東軍がやったんだよ』ということをごっそり耳打ちしてくれました」（石橋恒喜証言）

→報道機関は関東軍の謀略と知っていながら国益論から報道せず 当時は法的規制はなかった（日本人はなぜ戦争へと向かったのか NHKスペシャル）

● 多くの人が今度の戦争でだまされていたという。いくらだますものがいても、だれ一人だまされるものがなかったとしたら、今度のような戦争は成り立たなかったにちがいないのである。「だまされていた」といって平気でいられる国民なら、おそらく今後も何度でもだまされるだろう。いや、現在でも、すでに別のうそによって、だまされ始めているにちがいないのである。（伊丹万作映画監督 敗戦を受けての言葉）

政治家の言動

■「植民地をすべて放棄すべき」1921年石橋湛山（後に首相）

例えば満洲を棄てる、山東を棄てる、その他支那が我が国から受けつつありと考うる一切の圧迫を棄てる、その結果はどうなるか、また例えば朝鮮に、台湾に自由を許す、その結果はどうなるか。英国にせよ、米国にせよ、非常の苦境に陥るだろう。何となれば彼らは日本にのみかくの如き自由主義を採られては、世界におけるその道徳的地位を保つを得ぬに至るからである。その時には、支那を始め、世界の小弱国は一斉に我が国に向って信頼の頭を下ぐるであろう。インド、エジプト、ペルシャ、ハイチ、その他の列強属領地は、一斉に、日本の台湾・朝鮮に自由を許した如く、我にもまた自由を許せと騒ぎ立つだろう。（社説「一切を棄つるの覚悟」東洋経済新報1921年7月23日号より）

■「反軍演説」1940年斎藤隆夫代議士

「ただいたずらに聖戦の美名に隠れて、国民的犠牲を閑却し、曰く国際正義、曰く道義外交、曰く共存共栄、曰く世界の平和、かくのごとき雲を掴むような文字を並べ立てて、そうして千載一遇のチャンスを逸し、国家百年の大計を誤るようなことがありましたならば、現在の政治家は死してもその罪を滅ぼすことはできない」

■首相官邸に届いた「戦争せよ」との手紙 沸騰する世論

東条英機首相に届いた国民からの投書は3000通を超えた。そのほとんどが米国との戦争を望むものだった。米国との戦争をしない東条内閣は弱腰との批判が上がる。当時の「対米外交は強硬に出るべきか？」との世論調査では、6割以上が「強硬に出るべき」との結果（文藝春秋1940年1月号）

「反軍演説」
會議録に全文を

日中戦争が泥沼化した1940年、衆議院の荒廃隆末が帝国議会で政府・軍部を糾弾した「反軍演説」が、軍部を制しつづける軍国主義の台頭に警鐘を鳴らしたとして評価し、しかし、当時の衆院議長の判断で全体三分の二が賛成で通過したと主張され、事実上はなかった。戦後80年を機に、全文掲載を阻害す機運が与野党と産経のつづまり、秋の臨時国会で議論となる可能性が示された。

(长谷寺造)

臨時國會の議論

斎藤は40年2月の帝国議
会で、所屬していた立憲民
政黨を代表して質問した。
37年に始まった日中戦争の
終結方針が定まっていな
いことや、国民の負担が増大
していることを批判し、「皇

戦後80年

斎藤隆夫質問、帝国議会在大半削除



70年、兵庫県生まれ。東京
専門学校(現・早稲田大)を
卒業後、弁護士に。1912
年に衆院議員に初当選。電

戦の美名に隠れて国民的犠牲を關切（かんせつ）（はなむけ）にするにふ）し、（中略）國家百年の大計を誤るといふことがありましたらば、政治家は死してもその罪を滅せしむといふは出来ない」と語つて

天皇中心の軍事政権樹立を目指す陸軍の青年将校らが蔵相の高橋是清らを殺害した36年の二・二六事件後、斎藤は軍部の政治介入を厳しく批判する「齋藤寅

國主義を批判する「麗實演説子」区實演説子である。40年に英米を旅した方が、42年の總選挙で再び咲く。戦後は第一次吉田茂内閣に回った大臣を務めた。当選は2回。49年死去。言談が面白い青年時代に助産(もうじい)さん、本振く手筒を穿けて髪鬘が垂れたという面白い「ねずみの隠棲」にも呼ばれた。

1940年帝國議會での斎藤隆夫衆院議員の「反軍閥謀略」の主な内容

會議録に残っている部分

支那事変(日中戦争)の処理を考えるに当たりましては、
寸時も怠れてならぬものがある。それは過去2年有半
の長きにわたって国家国民が払い続けたところの絶大な
犠牲である

会議録から削除された部分

一たび戦争が起つたならば、もはや問題は正邪曲直の争いではない。是非善悪の争いではない。徹頭徹尾、力の争いである

いたらずに聖職の美名に隠れて、国民的犠牲を期し、國家百年の大計を誤るようなことがありましたならば現在の政治家は死してもその罪を償はすことでは足りない。國民に當つて國民の犠牲は決して公平なるものではない。國民に向かつて犠牲を要求するばかりが政府の罪責(役割)ではない。

※斎藤隆夫著「回顧七十年」から作成

「反骨」を諷刺を証明にした
いかに黒部は強く反骨。そ
れを破り、黒部は40年の月
に経歴を除き、諱をのこ
し、忠孝は職名と諱説のこ
約1千字を全諱録から削除
した。一冊の初版は、諱を
制臣主生養に改定政治の奉
効性をまつての忠孝を尊
敬している。

眞實なる母といふは、
 眞實なる「本國」に入る
 祖の「母」なるをいふ。因
 此を證明するに「本國眞
 實なる眞實なる」ト云ふ
 母をいふは「母」なるを
 いふに非ざる。此に照る
 といふは眞實なる眞實
 なる「本國眞實なる眞
 實なる」ト云ふに非ざる
 故、本國眞實なる眞實

地に於ては、實に國運に於ける「齊藤隆生日記修纂」の刊行に對する役當りと、齊藤の死の緣に對する齊藤壽親の「死」を本紙の取材に「現在」並條された事案と見て知つた。あの齊藤は「理發雜誌」に「今讀む」を著し、それを「わがわが」の「今」を回復して讀む」と言つた。

正された前例はないとい
う。

会議録への全文掲載を10
年ほど前から求める立憲民
主党の要求昭代代表代行は
「軍国主義が拡大する中、
言論が抵抗」ともつとた証
しは議会の正装は記録にと
どめるべきだ。戦後80年の
節目に回復させたい」と強
調。他党の感觸を察したこと
で、賛意を示す自民党議
員もおり、秋の臨時国会で
の實現を働きかける考え
だ。

戦争に至る道

～なぜ勝てない対米戦争を始めたのか？～ (作成 長妻昭事務所)

- 1930年 昭和恐慌への政府の無策 農村はじめ窮乏と格差拡大
- 1930年4月 ロンドン海軍軍縮会議 統帥権干犯問題(浜口内閣が軍から糾弾)
- 1930年11月 浜口首相が銃撃 翌年死亡
- 1931年 柳条湖事件(関東軍の謀略)→満州事変拡大をマスコミが支持
- 1931年 治安維持法が変容(反戦を厳しく取り知るようになる)
- 1932年 血盟団事件(「財閥政治打倒」のスローガンが国民に共感)
- 1932年 犬養首相が海軍青年将校らに暗殺(5・15事件)→政党政治の終焉
- 1933年 国際連盟から脱退 →マスコミが脱退を強くけしかける→松岡外相が国民的ヒーローに
- 1934年 帝人事件(インサイダー疑惑 斎藤実内閣が総辞職)
- 1935年 国鉄疑獄事件→軍部が「政党腐敗」を大きく宣伝
- 1938年 国家総動員法 国民に強力な統制
- 1936年2月 2・26事件(陸軍青年将校らに高橋蔵相、陸軍教育総監ら殺害)
- 1936年5月 軍部大臣現役武官制が復活→軍部による組閣阻止が可能に
- 1937年 盧溝橋事件→日中戦争→政府とメディアの挙国一致報道体制に
- 1937年 教育の戦時体制への切り替え 皇国の道に則(のっと)る皇国民の錬成へ
- 1938年 陸軍中野学校(前身)設立 スパイ・ゲリラ養成等
- 1940年2月 斎藤隆夫代議士の反軍演説 議事録削除・除名
- 1940年9月 日独伊三国同盟調印 メディアに強く促され調印
- 1940年10月 大政翼賛会発足(全政党を解散 天皇・軍の下での新体制)
- 1941年7月 日本軍が南部仏印に進駐→米国反発、石油の全面禁輸
- 1941年12月8日 真珠湾攻撃→多数の国民・メディアは喝采(釈迦が悟った成道の日でもある)

<なぜ、勝てないと分かっていた対米戦争を始めたのか？>

● 政治の上に軍があった シビリアンコントロール・文民統制の欠如 「私たちの国は軍事の論理だけで政治、国を動かした」（保阪正康）

→「海軍が戦争できないと反対したら、右翼や陸軍がですね、これに対して内乱を起こすと言っているんです。内乱を起こすと人数上、（陸軍に）海軍はかなわないから「結局そういう連中、右翼の米開戦（対米開戦）をやらせよう」というのが僕（永野軍令部総長）の考えで、（打ち明けられた）」（海軍軍令部作戦課三代一就海軍元大佐 海軍反省会）

● 陸海軍の予算獲得競争がコントロール不能 国家予算の7割が軍事

海軍（軍令部）が米国との危機を煽って予算を獲得し、その後、（米国と）和平する目論見あり。予算獲得の方便として危機を煽ったがそれによって戦争を避けることができなくなり突き進む要因となってしまう。（NHK海軍反省会ナレーションより）

→「軍備拡張のために随分予算を使った。戦えないとは一切言わない」（三代一就海軍元大佐）

- 明治以来戦争に負け無し おごり 自国の国力の冷静な把握に欠ける 願望第一
- 国際協調を軽視 世界情勢の見誤り 外交の上に軍事 低いインテリジェンス能力
- 政党政治の腐敗が極まる 軍部の信頼拡大 → 議会制民主主義の喪失 テロの季節
- 昭和恐慌への政治の無策 農村をはじめ国民の格差拡大
- メディアが戦争あおり、売り上げ競争
- 作られた国民の熱狂が制御不能に ナショナリズムのあおりすぎ
- 軍部の隠ぺいと虚偽発表 開戦ありきのつじつまあわせ → 議会・メディア批判なし
- 戦争反対は非国民 治安維持法の変容 同調圧力（空気力）強まる
- 教育の戦時体制化 皇国の道に則（のっと）る皇国民の錬成へ

＜新しい戦前とならないために＞ （作成 長妻昭事務所）

戦争は、その姿を現す随分前から始まっているものです。おそらくは人々が口をつぐみ、物申すことをやめたときから（「暮らしの手帖」編集部）
「抗えない空気」「やましい沈黙」

- 厳格なシビリアンコントロール 文民統制 外交の下に軍事
- 立憲主義、議会制民主主義の確立
- 政府を厳しくチェックする議会やメディアと国民 政府の隠ぺいや虚偽
- 政治腐敗を根絶 信頼回復 政治の質を高める
- 世界平和を作り出す先頭に立つとの、力強い国の意思と外交戦略
- 世界情勢を見誤らない広い視野とインテリジェンス
- ナショナリズムのあおりすぎによる制御不能を避ける 国際協調の意義
- 「国策を誤った」戦争の教訓を明確化し政府と社会で共有する取り組み
- 戦争の記憶を風化させないための不断の取り組み 教育
 - 権利・格差・多様性を軽んじない 社会・政治・教育
 - どんな環境にあっても持ち味が活きる社会 格差是正
 - 同調圧力（空気の色）が強すぎず、声を上げやすい社会

<戦後懸案問題、長妻昭のこれまでの取り組み>

● 2010年 **戦後初、厚生労働大臣当時、懸案だったシベリア抑留者補償法案を成立させる** (民主党政権下、自民政権ではできなかった法案) * 大手新聞社編集委員より、民主党政権最大の成果と賛辞をいただく

● 2006年 村山談話にある「国策を誤る」の具体的中身について政府に問い(質問主意書)閣議決定

Q 政府は「国策を誤り」には対米戦争が含まれると考えているのか？また、政府は国策を誤った原因はどこにあると考えているのか？

A お尋ねの「国策を誤り」については、個々の行為に対する評価等をめぐり様々な議論があるところ、政府として、その原因を含め、具体的に断定することは適当でないと考える。

→政府は戦後、一度も昭和の戦争の総括をしていない。胸に刻む教訓がない。

● 2007年 **213兆円、戦後初、戦費の現在価値が国会質問で明らかに(日中戦争から敗戦)**

「現在価値につきましては(略)おおむね213兆円という数字になるところでございます」(2007年4月27日衆議院外務委員会 財務省主計局次長)

* 戦費(臨時軍事費特別会による 1937年9月～1945年8月まで)の現在価格を国会質疑、政府答弁。

● 2010年 **硫黄島ご遺骨収集と視察 大臣としてはじめて宿泊**

→当時の民主党政権で日本人埋葬場所(米国資料)を突き止めご遺骨収集が大幅に進展

太平洋戦争開戦時の日米国力比較

山田朗「軍備拡張の近代史」吉川弘文館から作製

兵員総数 ■ 242万人……日本
■ 188万……米国

軍艦総数 ■ 385隻
(小船艇含む) ■ 341

陸海軍機総数 ■ 4772機
■ 1万2240

国民総生産 ■ 449億円
■ 5312億

粗鋼生産量 ■ 684万ト
■ 8284万

航空機生産量 ■ 5088機
■ 2万6277

商船保有量 ■ 609万ト
■ 1009万

国内石油産出量 ■ 28万バレル
■ 2億2295万



「国民抗戦必携」表紙

三、手榴彈投擲

重量百七十匁。半径七米有効の制式手榴彈のほか、柄付、空瓶や罐詰を應用したものがある

操作は第一に安全栓を抜いて發火を確かめ、次に平常の訓練で自身の投擲能力を拾分に知ること、第三は投擲動作は極力体の露出を小さくすること

四、白兵戦闘、格闘

上背のあるヤンキーとともに對する白兵格闘の要領は突きが一番だ斬ったり拂ったりすることは腕に自信のない限り致命傷を與へることはむつかしい

刀や槍がなくとも鎌、ナタ、玄能、出刃包丁、鳶口いづれも立派な奇襲兵器だ

單獨行動の敵ならばさつと背後から打ってかかれれば必殺は容易だ、鎌の柄は三尺位が扱いよい

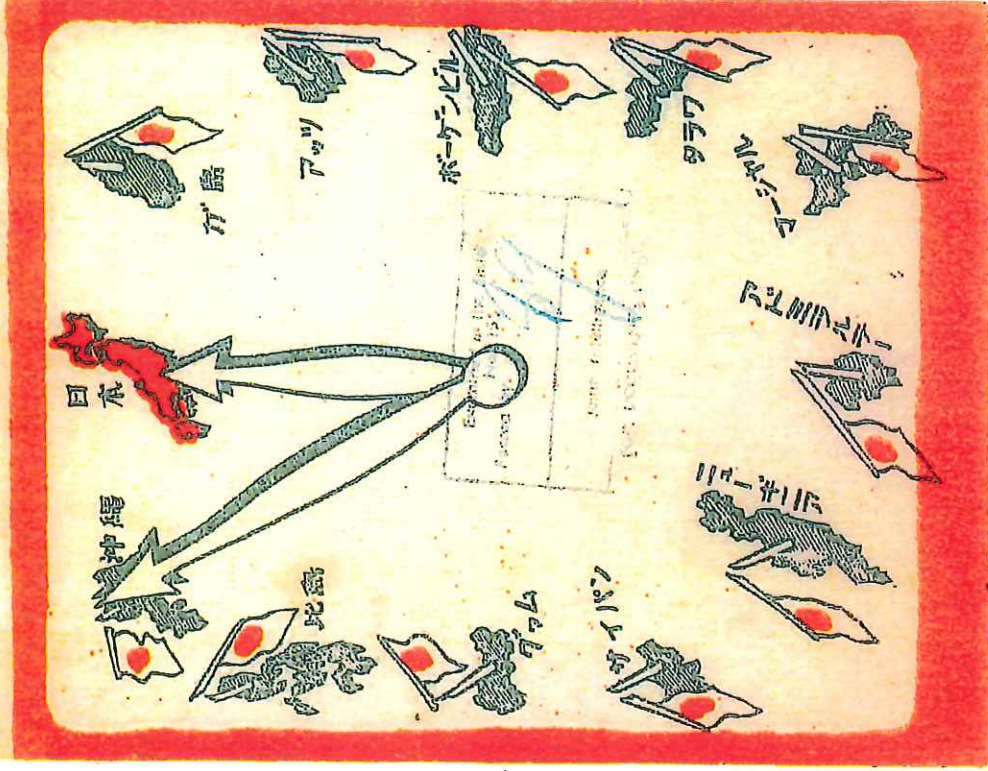
格闘になつたら上から襲いかかる敵に對して身を沈めて水落を突いたり辜丸を蹴上げたりする

柔道、唐手などわが國獨特の體當たり武道を發揮するのだ

以上いづれも捨身で躍りかかつてこそ勝利がある

1

時は迫れり!!



時分は迫れり!!<18J1>



1945年 15.0×10.1cm

米軍は日本に対し無条件降伏を要求していった。この用語自体はすでに1943年のカイロ宣言（No.3-4-1）に登場していたが、双方にとって現実味を帯びてきたのは45年に入ってからであり、要求伝達の手段となったのが伝單であった。これはフィリピン方面で撒かれたもの（No.4-4-9）の改訂版というべきもので、時計の針が一つ進んで沖繩を指し、前回とは違つてはきつりと「無条件降伏」を要求している。一見日本の民衆に語りかけているようだが、真の狙いは革命勃発を恐れる指導者層への揺さぶりだ。事実、沖縄陥落のころから日本の指導者層内において終戦工作が進められていく。

No. 6-1-1

皆様!!日本本土は今又未曾有の危機に直面してゐます。開戦當初は必勝を叫んでゐた軍部が戦局の悪化に狼狽して勝利がしめようせんば滅亡か?と全く惨絶的な文句を弄し自己の責任を棚にあげ更に國民に新たな犠牲を求めてゐます。軍部のやばは故を食つて現状の如き連日の空襲の惨害に曝されてゐる皆様に米軍は非常に同情しては居ります。但此の様な國家の将来と國民の幸福を踏み躓つた軍部を完全に打倒する迄より一層烈しい戦を遂行しなければなりません。しかし皆様のご指導ご支援は其の決心一つで今直ぐに祖国日本を昔の平和に導く事も出来まし又歴史上初めて見た悲惨なる破滅に陥し入れぬ事も出来るのです。

無條件降伏は寧に軍事用語で取りも直さず戦争の
中止と軍部の崩壊を意味するのです。所が軍部は之を
以て國民の奴隷化民族の奴隷を意味するものなりと
盛に宣傳してゐます。之は自己の面目保持に躍起と
なつてゐる軍部が最後の土壇場に何んといふ國民を絶
望的抗戦に張り立てんとする仕業に過ぎません。

「貴様は寧ろ自己の敗戦の責任を恐れ老し延べられた平和の手を振り拂ひ日本を破壊に陥れろりものだ。まづて見ておられますか？ 貴様!! 今の内に徹底的破壊から救ひ新しい日本を再建に努力しようではありませんか。」

112-1-1

天子ノ獨逸ニ潰滅せり 日本國民諸氏も
 我米國陸海空軍の絶大なる攻撃力も
 認識せしむらむ
 貴國爲政者並に軍部が戦争を繼續する
 限り我が攻撃は愈その破壊及び行動を
 擴大強化 日本は作戦を支持する軍部生産



日本國民
 諸氏
 アメリカ合衆
 國大統領
 ハリー・ス
 ミューア
 より一書
 呈す

日本国民諸氏 <No.2088>

米軍伝単(対日本人)
 1945年5月 10.2×14.1cm

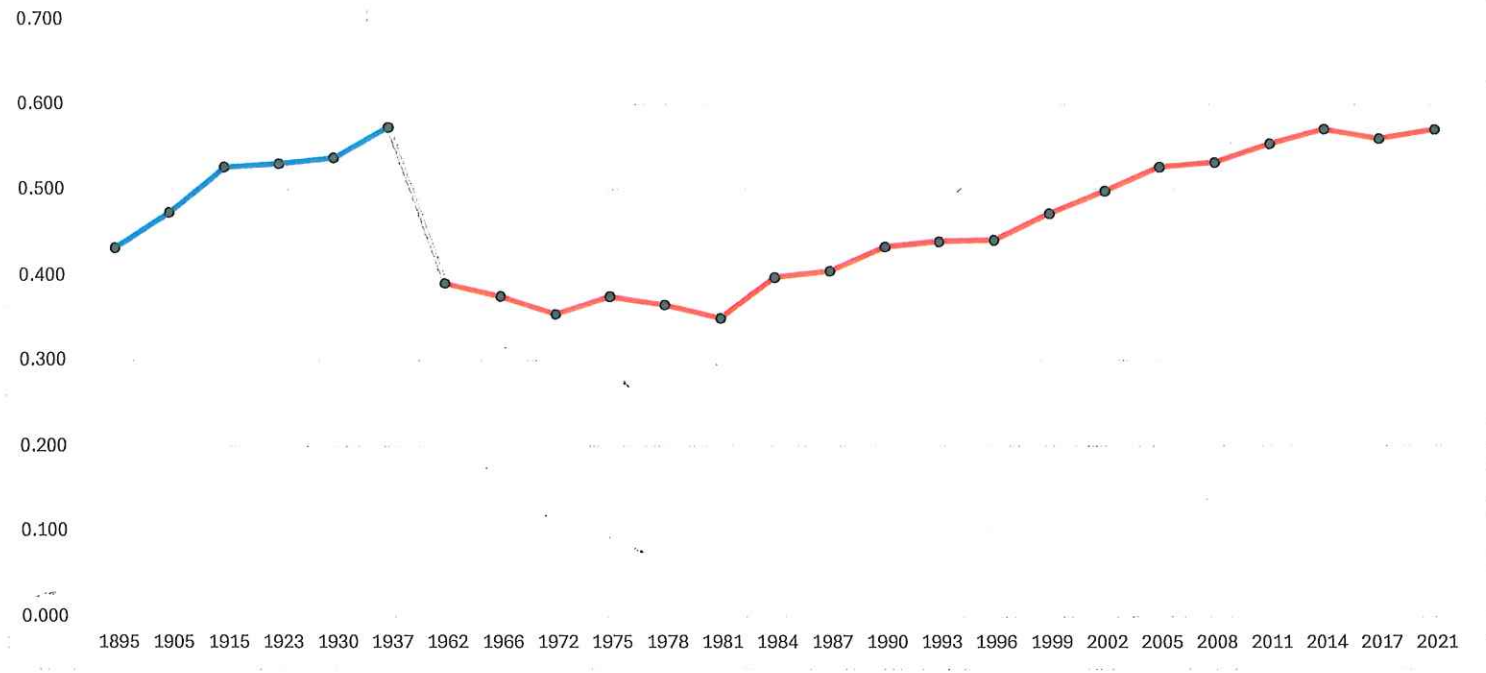
トルーマン大統領自ら、無条件降伏は日本国民の奴隷化を
 決して意味しないと強調したものの、1945年6月1日の朝日新
 聞などでも批判的に報道された。これを拾った壺井繁治
 (『二十四の躰』作者壺井栄の夫、作家)は「古くさい漢文調で
 あるにもかかわらず、わたしたちの興味を唆る異常な吸引力
 をもち、暫くの間、このビラから眼を離すことはできなかつ
 た」ので焼かずに米櫃の底に隠したと回想している[壺井繁治
 1966]。日本の民衆は、戦争にはもう懲りていたが、ざりと
 て「日本を現在の破壊の縁に誘因せる軍部の権力」を打倒する
 意思も方法も持たなかった。一方、作家の吉村昭によると、
 これらの米軍伝単は、町内会でまとめて回収し、警察に引き
 渡していたそうである。壺井の印象とは異なり、中身は古く
 さいばかりでとくに感じるところはなかった、という[吉村
 昭2001]。当時まだ中学生と若かったためでもあろうか。

壺井の他人を奴隷にする道義に反し
 答へて人々に啓す 壺井の啓は日本國民
 の無事を欲するに對するものなり 國民得
 るべきは正義なり 壺井の啓は日本國民が
 正義に對して一歩も退くことを許さざるに對
 して分るべき 壺井の啓は日本國民の愛國
 心は正義に對して一言も退くことを
 許さざるに對して分るべき 壺井の啓は
 戦争の終結を望む日本國民の心を、破
 壊の縁に誘ふ軍部の権力を消滅せしめ
 前線に在る軍部を誘因せる軍部の権力を
 消滅せしめ 壺井の啓は戦争の終結を
 望む日本國民の心を、破壊の縁に誘ふ
 軍部の権力を消滅せしめ 壺井の啓は
 壺井の啓は日本國民の心を、破壊の縁に
 誘ふ軍部の権力を消滅せしめ

No.6-1-3

戦前と同じほど格差が拡大している

(当初所得ジニ係数)



(注1) 1895年、1905年、1915年、1923年、1930年、1937年の値は、南（2000）による推計

(注2) 1895年、1905年、1915年の値はそれぞれ1891-1900年、1901-1910年、1911-1921年の各期間の推計の平均（南（2000））

(注3) 1962年以降の値は厚生労働省（厚生省）『所得再分配調査』（各回）

(注4) データが存在する年の間を線で繋いでいるため、補完されている年について実際の値ではない。

(出典) 1895年～1937年について南亮進「日本における所得分布の長期的変化—再推計と結果—」『東京経大学会誌. 経済学』219号, 2000, p.44、1962年以降について厚生労働省（厚生省）『所得再分配調査』各回